清末政治小説の術語、概念の形成と明治政治小説との関わり

寇　　振　鋒

1．はじめに

明治日本の初の翻訳政治小説『欧州奇事・花柳春話』（五冊）は丹羽純一郎によって翻訳され、1878年11月より刊行された[1]。二十七才の丹羽純一郎はイギリス留学から帰国の船中で「無聊の余り」[2]に原作『アーネスト・マルトラヴァース』、及び『アリス』を読んで大いに興味を感じ、帰国後、翻訳に着手した。偶然であるが、ほぼ同い年である二十六才の清末政治小説の元祖梁啓超（1873～1929）は、1898年戊戌政変後、日本に亡命する船中で、同じく暇つぶしのために、東海散士（実名は柴四朗）の政治小説『佳人之奇遇』に読みふけりながら翻訳を始めた。梁啓超は日本到着二ヵ月後の1898年12月に、横浜で旬刊『清議報』を発刊し、創刊号から漢訳本『佳人奇遇』の連載を始めた[3]。

『清議報』創刊号所載の漢訳『佳人奇遇』と、その序言としての「訳印政治小説序」は、中国の「政治小説」の初登場を表している。なお、中国初の独自の政治小説『新中国未来記』はまた、梁啓超の創作であり、政治小説『雪中梅』の影響を受けたうえで[4]、「『佳人之奇遇』を経とし、『経国美談』を緯として作られた」[5]のである。当書は1902年12月に横浜で梁啓超自らが主宰し、創刊した月刊小説誌『新小説』の創刊号より連載を開始した[6]。以上から分かるように、清末政治小説の術語、概念の形成に関する一連の試みは、すべて明治日本で行われたものである。しかし、それらに関する研究と追究は、まだ十分行われていない[7]。

そこで本稿では、清末政治小説の形成における術語、概念を主として取り上げ、それらが明治日本政治小説の術語、概念といかに関わっているかを、明らかにしたいと思う。

2．戊戌政変前の清末中国における明治政治小説に対しての間接的認識

戊戌政変前、梁啓超等の改良派は、明治日本をまねて政治維新に力を注ぐ際に、日本の小説に対しても、ある程度の認識を持っていた。例えば、1897年に梁啓超は「蒙学報演義報合叙」の中で、次のように小説に言及している。

故に日本の変法は、俗歌と小説の力に頼った。蓋し子供を喜ばせるため、愚昧な民を

導くためのものは、未だこれより善しとする者がない。[8]

なお、この文章が発表された十三日後の同月18日、厳復と夏曾佑は『国聞報』に連載した「国聞報附印説部縁起」の最終回において、「且つ欧米、日本は、其の開化において、往々にして小説の助けを得ると聞く」[9]とし、梁啓超と同様、日本において小説が開化に果たした役割を伝聞の形で指摘している。

つまり、両者はともに、日本の明治維新の推進において、俗歌と小説の力に負うところが大きかったと認識した。言い換えれば、彼らは小説が中国人の開化にとっても、同じく効き目があると予想したのである。

さらに上に触れた「小説」にはすでに、政治小説の意味が含まれていると思われる。同1897年に刊行された康有為『日本書目志』中の「小説門」には、一五一六点があり、その中に、「政治小説」と「政事小説」を角書に持つ政治小説はそれぞれ六点と一点が入っている[10]。しかし術語「政治小説」の正式の導入とは言い難い。この書誌はまた、光緒皇帝に進呈されたものであるという[11]。梁啓超は、これについて二千字余りの「読日本書目志書後」を書いて、日本書の漢訳を大いに主張している[12]。そしてまた、「訳印政治小説序」（上述）で、梁啓超は康有為「小説門」の説を大きく引用する。以上のことから、梁啓超は「政治小説」「政事小説」という角書を持つ「小説」を入れた『日本書目志』に目を通したことがあると考えられよう。にもかかわらず、当時は変法至上であった梁啓超に、小説を顧みる余裕は全くなかった。そこで、梁啓超が明治政治小説の実作を見るまでは、政治小説は清末中国に正式に現われることができなかったと考えられる。

この政治小説に対する間接的で朦朧とした認識は、中国国内で芽生え始め、それは日本明治維新を評価したうえで、生み出されたものである。これは、小説が軽蔑され、低い地位に置かれていた清末において、間違いなく新しい兆しであった。そしてそれは、識者が小説の社会的効用に注目し始めたことを表明している。換言すると、戊戌政変前の識者の小説に対する注目から、明治日本が彼らに及ぼした間接的影響がうかがわれる。

3．清末中国における明治日本「政治小説」という術語の導入

明治日本の政治小説という術語の定着過程を見てみよう。明治日本において、術語「政治小説」「政事小説」は1885年以後に現れた。それ以前は、「政事に関する稗史小説」、「政論稗史」、「稗史小説」、「政治上の稗史」等と呼称されていた[13]。

それ以降は、「政治小説」、「政事小説」の術語がほぼ同時に舞台に登場してきた。例えば、1885年５月に、烏々道人と署名した坂崎紫瀾が「政治小説の効力」[14] の中で「政治小説」を使い、1885年７月に和田半狂は「日本の政事小説」と「政事小説の作者」中で「政事

小説」を使い始めた[15]。

坪内逍遙も同1885年８月に「小説を論じて書生気質の主意に及ぶ」中で「政事小説」を使い始め[16]、なお、同年９月に公刊された『小説神髄』で、引き続き、「政事小説」を使った。坪内逍遥は『小説神髄』で次のように触れている。

> 政事小説は専ら政事界の現況を写しいだして、暗に党議を張らまくする政事家の手になれる物多し。ベカンズヒィルド〔美イコンスヒ井ルド〕侯の『春鶯囀』、〔矢野文雄大人の纂訳せられし経国美談〕など其例なり[17]

ところが、『小説神髄』に取りあげられ、関直彦によって翻訳されたディズレーリの政治小説『政党余談春鶯囀』の冒頭の「自序」中で、彼はすでに『春鶯囀』を「政治小説」として明らかに認めている[18]。言い換えると、訳者関直彦は『春鶯囀』を、正々堂々と「政治小説」と名乗って翻訳したのであり、それがただ表紙にあがらなかったにすぎないということが分かる。最も影響力の強かった『小説神髄』においては、「政事小説」と「政治小説」は同一視されていると考えられるが、しかし坂崎紫瀾や坪内逍遥より、関直彦のほうが一年あまりも早く「政治小説」を使っていた。

しかし、「政治小説」「政事小説」の角書を持つ小説実作は、評論等の後に登場した。それぞれの実作の嚆矢は、1886年８月に刊行された末広鉄腸の『政治小説雪中梅』と、翌年に刊行されたその続編『政事小説花間鶯』である。『雪中梅』は、青年家国野基の苦節と成功、及び彼と女教師富永春とが結婚する話を叙する政治小説である。『雪中梅』は『経国美談』『佳人之奇遇』に次ぎ、ベストセラーの政治小説となった。したがって、『雪中梅』の成功によって、多くの「政治小説」の角書に持つ政治小説が生まれてきた。柳田泉「政治小説年表」によれば、『雪中梅』以後に「政治小説」を角書に持つ政治小説数は、四十二篇である。一方、『花間鶯』以降の「政事小説」は、五篇であった[19]。

したがって、明治日本において、「政治小説」は「政事小説」より多いが、最初から、「政事小説」と「政治小説」の術語はほぼ平行して使用されていたことが分かる。角書「政治小説」の大量出現は、術語「政治小説」を完全に定着させた。すなわち、術語「政治小説」の登場につれて、過去と同時代、及びそれ以降の政治小説が「政治小説」としてカテゴリー化され、政治小説というジャンルが、更に定着されることとなった[20]。

日本政治小説の術語の定着には数年かかったが、しかし明治政治小説の変化経路を完全に見定めることができた梁啓超は、日本亡命後間もなく「政治小説」を中国に直ちに導入した。前に触れたように、清末中国において、康有為の『日本書目志』には、「政治小説」「政事小説」が入っていたが、それは、書目として収録されたのみで、やはり「政治小説」の出現とはいえない。いったい何が「政治小説」の中国における登場を示すの

か。筆者はそれを示す現象として、次の四点を挙げたい。

第一に、『清議報』創刊号の冒頭に掲載された、「清議報叙例」中で、「政治小説」は六大ジャンル中の一つとされている[21]。しかも、この「政治小説」のジャンルは、『佳人之奇遇』に次ぎ、『経国美談』連載中断の第69冊まで続いて掲載された。

第二に、『清議報』創刊号に掲載された、中国初の政治小説理論としての、「訳印政治小説序」中に、「政治小説」という言葉が、タイトルを含めて三回使用されている[22]。

第三に、『清議報』掲載の原稿募集の広告にも、「政治小説」が終始入っている。しかも、角書の形式で登場したのもある。例えば、「政治小説」の角書を持つ「政治小説経国美談全書印行告白」という広告は、『清議報』第71冊から第79冊まで掲載され、「政治小説累卵東洋」の広告も『清議報』第80冊と第100冊に掲載されている。

第四に、「政治小説」の登場については、『清議報』の中国国内での伝播状況から切り離せない。「政治小説」という用語を背負っている『清議報』は国内外で広く発売されていた。国内における発売所は、最初が二十三省市の三十二ヶ所で、最も多かった場合、二十四省市の三十八ヶ所となった。そして『清議報』を「求める手紙は雪片が飛んでくるような（索報函件、如雪片飛来）」勢いで好評を受けた。その平均の販売冊数は三、四千に達していたという[23]。また、『清議報』は当時の識者や知識人の必読の書物となっていた[24]。したがって、「政治小説」という術語は数多くの人に熟知されていったのであり、登場というよりも、むしろ人心に深く入り込んだと考えられる。

『清議報』における政治小説のジャンルは『佳人之奇遇』、および『経国美談』のために開設された。「訳印政治小説序」も『佳人之奇遇』のために書かれたものである。以上のように、清末の政治小説という術語の形成は、横浜で創刊された『清議報』と緊密な関係を有することが分かる。つまり、横浜での『清議報』の創刊、及び『佳人之奇遇』『経国美談』の訳載こそが、「政治小説」が清末の舞台に正式に登場し始めたことを表している。

原作『佳人之奇遇』は1885年10月より発行された。梁啓超の日本亡命の前年の1897年10月に、全篇が八篇十六巻で未完のままで発行されるまでに、前後十二年を要していた。原作『佳人之奇遇』には「政治小説」の字が現われていないが、しかし術語と実作の政治小説は同時に、日本到着二ヶ月後梁啓超によって『清議報』を通じて日本から取り入れられた。どうしてそのように迅速であったのかについては、以下の三点の可能性が考えられる。

第一に、梁啓超の新しい事物に対する渇望のためである。梁啓超は日本到着後、「日々文字の奴隷」となり、「すこし日本語を読むことができ、思想がそのため一変する」程度となった[25]。しかも、来日後、彼は日本書を読む実利的な点を十分認識していた。

哀時客（梁啓超の号――寇注）既に日本で数ヶ月住み、日本の文を習い、日本の書を読む。過去に未見の書籍が絶えずに目に入り、過去に窮めることのなかった理が頭に飛び入ってくる。ほの暗い部屋で太陽を見、空腹に酒を得たようである。独りで得意ではあるが、自分のためにだけしようとするのではない。

同じ文中で、梁啓超は続いて、次のように記している。

日本に住んで以来、広く日本書をさがして読む。山あり川ありの山陰の道を歩くように、応接に暇がない。脳質がそれによって改まり、思想言論は以前と別人のようになる。[26]

日本に到着したばかりの梁啓超は、日本のあらゆるものに対して新奇を感じ、国人への紹介に取り組もうとした。そのため、政治思想を含む、目新しい政治小説が真っ先に紹介すべきものとなったと考えられる。

第二に、前述のように、明治日本において、『雪中梅』以後、政治小説はすでに「政治小説」としてカテゴリー化された。それは梁啓超が日本に赴く十二年前のことであった。しかも、日本到着後の梁啓超は、明治後期政治小説の時流の中にあった[27]。なお、1901年5月の漢訳政治小説『累卵東洋』の「累卵東洋・序」によると、当時の本屋には、政治小説が「数十乃至百種を下らない（不下数十百種）」という量が存在した[28]。したがって、政治小説に関して、梁啓超が見たり聞いたりする身近な直接的接触があったことは、言うまでもない。

第三に、日本政治家との付き合いも一つの要因として考えられる。梁啓超が日本に着いた直後、日本政治家たちとの付き合いについて、次のように記されている。

東京に着いた当初、牛込区馬場下町（要調査――原注）に住んでいたようです。当時、大隈の側近であった犬養毅、高田早苗、柏原文太郎（この人は任公先生と親密であり、このころ兄弟の契りを結んでいました――原注）は、しばしば往来していただけでなく、彼に日本語の文法を精力的に教えていました（『和文漢読法』は任公先生の著作です――原注）。[29]

梁啓超に日本語を教えていた高田早苗（1860～1938）は、かつて「我国における西洋風の批評の元祖である」[30]と自慢する「佳人之奇遇批評」という文章を書いた。しかも、この文章は新しい体裁の政治小説に対して、「明確なジャンル認識に立脚する初の批評である」[31]。したがって、梁啓超の漢訳中の『佳人之奇遇』、及び術語「政治小説」は、

当時、梁啓超と高田早苗の間で話題となった可能性がある。

また、当時梁啓超の小説翻訳においては、田野橘治、古城貞吉、山本梅崖などの助言があったと指摘されている[32]。さらに、亡命後の身辺の世話をした人物として、前述の柏原文太郎以外に、鈴木虎雄、桂湖村、船津輪助らも、梁啓超の訳業に何らかの形で関わった可能性が否定できないとされる[33]。そのため、「政治小説」について多くの人々の口から聞かされていたことが考えられよう。そこで、「政治小説」という術語が、当然漢訳本『佳人奇遇』と直接につながっていったのだと考えられる。ここで分かるように、日本人との交流は恐らく、政治小説の翻訳ばかりではなく、政治小説という術語、及びその概念の導入にも役に立ったと推測される。

以上の三点が、梁啓超が日本到着後間もなく、『清議報』を通じて、術語「政治小説」を導入できた理由である。

『清議報』の好評発売、及び『佳人之奇遇』『経国美談』の訳載によって、政治小説という術語は広く知られたと思われる。しかも、政治小説はまた、角書というスタイルで国内にも導入された。更に好評のうちに発売された『新小説』において、明治政治小説をまねた、「政治小説」という角書を持つ、梁啓超による中国初の政治小説『政治小説新中国未来記』と、漢訳明治政治小説『政治小説回天綺談』が相次いで掲載されていた。このように、『清議報』の創刊が政治小説の出現を表わすと言うならば、『新小説』の刊行は、「政治小説」という術語と角書が清末中国で正式に定着したことを意味する。『新中国未来記』の後、「政治小説」と名乗った小説が次々と生まれてきた。例えば、『新小説』に次いで1903年5月に上海で創刊された小説誌『繡像小説』には、『政治小説珊瑚美人』、『政治小説回頭看』のような「政治小説」の角書を持つ政治小説が登場している。

すなわち、清末政治小説の翻訳、及び創作は、明治政治小説と切っても切れない関係を有する。そして術語「政治小説」、及び角書「政治小説」はともに、明治日本からの直接移入である。

4．清末中国における明治政治小説概念の導入

まず、明治日本政治小説の概念を振り返ってみよう。政治小説理論の角度から早くに「政治小説」を使った人物は、坂崎紫瀾が挙げられる。1885年5月、坂崎紫瀾は、「政治小説の効力」の中で、次のように述べている。

> 抑も西洋の政治小説なる者は彼の新聞と演説とに対して政党論戦の三大器械とも評せらるる程のものなれば其趣味も亦高尚にして中等以上の人物をも感動するの効力ありとす[34]

以上の文章から、彼が性質と効力の点から政治小説を定義しようとしたと見ることができる。政治小説の性質は、政党論戦の三大武器とされており、その政治性の存在については言うまでもない。そして、他の小説と比べても、政治小説は趣味が高尚であり、そして人を感動させることができると考えられた。

『小説神髄』の原稿は遅くとも1885年２月３月頃に成立したが[35]、しかし刊行されたのは、1895年９月以後である。また重ねて引用することになるが、坂崎紫瀾より四ヶ月遅れて公刊された『小説神髄』上巻において、坪内逍遥は政治小説の概念について次のように記している。

政事小説は専ら政事界の現況を写しいだして、暗に党議を張らまくする政事家の手になれる物多し。ベカンズヒィルド〔美イコンスヒ井ルド〕侯の『春鶯囀』、〔矢野文雄大人の纂訳せられし経国美談〕など其例なり

ここで見られるように、坪内逍遥は、政界に対する写実と政論の展開から政治小説を論義した。そして、具体例として1884年に関直彦によって訳されたディズレーリの『春鶯囀』、及び1883年（前篇）と1884年（後篇）に前後刊行された矢野龍渓の『経国美談』を挙げている。坂崎紫瀾の論は、坪内逍遥よりその効力を強調している。このように両者は、政治小説のために議論を展開したと考えられる。

清末政治小説の概念は、やはり最初梁啓超によって論義された。梁啓超は「訳印政治小説序」中で、次のように指摘している。

政治小説の体裁は、泰西人より始まる。（中略）昔欧州各国の変革の始まりには、その魁儒碩学、仁人志士が往々にして自身の経歴、及び胸中に抱えた政治の議論を、すべて小説に寄託した。

それによって、梁啓超は「西洋各国の小説の創作情況を参考にして政治小説の概念を提出した」との指摘がなされている[36]。これに対して、再検討する必要があると思われる。

確かに、梁啓超の文章では、西洋各国の「魁儒碩学、仁人志士」という政治小説の作者の存在の意味を指摘している。しかし実際上、政治小説の作者柴四朗、矢野龍渓など政治家としての官職・地位などからも直接的な影響を受け、重要視したと考えられる。梁啓超はまさしく『清議報』中で、政治小説作者の「魁儒碩学、仁人志士」の官職・地位を強調していた。梁啓超は『清議報』創刊号において、『佳人奇遇』の著者を「日本東海散士前農商部侍郎柴四郎撰」（「朗」の誤植であろう。――寇注）と記し、また、「飲冰室自由書」において、『経国美談』の著者矢野龍渓を「矢野氏は、今、中国の公使で

あり、日本文学界の泰斗で、進歩党の傑物である。」[37]、と評価している。なお、『清議報』第36冊から連載し始めた『経国美談』の著者矢野龍渓に対しては、「前出使清国大臣日本矢野文雄著」と記している。両小説はともに、読者の注目を集めるために、著者の官職・地位が堂堂と掲げられている。

なお、明治の初期翻訳政治小説においては、同じく作者の地位が強調されている。丹羽純一郎は『花柳春話』を刊行の際に、リットン（1803～1873）の官職を掲げなかったが、しかし関直彦が翻訳したディズレーリ（1804～1881）の『政党余談・春鶯囀』（1884年３月）、及び渡辺治の翻訳したディズレーリ『三英双美・政海之情波』（1886年10月）には、ともに冒頭にディズレーリの略伝が掲げられており、まず彼の宰相大臣の地位を強調している。『春鶯囀』の表紙には、「英国　故大宰相ビーコンスフヰールド侯著」、と明記しうえで、関直彦は「春鶯囀自序」において、「凡そ人としてコニングスビー（春鶯囀の原著――原注）を読まざるはなく又人としてコニングスビーを談ぜざるはなしとは英人ウエムシスレイド氏が英国故大宰相ビーコンスフヰールド侯ジスレイリ君の著はせしコニングスビーと題する政治小説を評したる語なり」と高く評価し、自序の後に、「故大宰相ビーコンスフヰールド侯ジスレイリ君略伝」を掲げている。そして、「春鶯囀凡例」の冒頭においてもディズレーリの宰相地位を真っ先に持ち上げている。

「ディズレーリの紹介は、当時の政治小説に多大な影響を与え、『小説神髄』の発表と相まって、爾後の政治小説の形式を決定したといっても過言ではない」[38]と評価されている。このように、「政治小説の体裁は、泰西人より始まる。」と明言した梁啓超はむしろ、明治翻訳政治小説のスタイルからの影響が相当に強かったと言えよう。そのため、このような「魁儒碩学、仁人志士」の地位の権威によって、政治小説の地位を高めようとしたやり方はまた、初期の明治翻訳政治小説に、模倣の手本が見つかる。つまり、当時の西洋各国の小説情況は梁啓超が直接目にしたのではなく、すべて明治日本経由の伝聞であったにすぎない。彼は政治小説の由来から概念を規定しようとするが、しかしそれは、西洋各国を自分の目で参照したのではなく、明治政治小説の環境においてこれを参照して生まれたのである。

なお、梁啓超はまた、日本政治小説について、次のように定義している。

> 著者たちは、皆一時の大政論家である。自己の政見を書くために、書中の人物に寄託している。もとより専ら小説として見なしてはいけない。[39]

ここの「小説」とは、政治思想が含まれていない、一般的な小説の意味であろう。大政論家が政見を書中の人物に託した小説こそ政治小説である。ここでは同じく政治小説の性質から指摘したものと見られる。

さらに、三年後の梁啓超はまた、次のように明確に定義を下している。

政治小説は著者が心の中で抱いている政治思想を打ち明けようとするものである。その議論は皆中国を主として、内容はすべて想像によるものである。[40]

前半は政治小説全体の定義であり、後半は中国に限定し、中国なりの政治小説を定義している。なお、この文章において、梁啓超は引き続き、「その書は皆自著による。書目は以下の如く。」と指摘し、『新中国未来記』と、結局未執筆であった『旧中国未来記』『新桃源』（一名『海外新中国』）の梗概を列挙している。そのため、ここにおいて、実作『新中国未来記』を念頭において指摘したと考えられる。しかも、この定義からは、梁啓超が中国なりの政治小説を創作しようとする決意がうかがわれる。

梁啓超によって下された三回の定義に見られる説は、一貫していると言えよう。しかも、その三回の定義はまた、前に触れた明治政治小説の概念に酷似している。

例えば、両者の定義はともに、政治宣伝の大きな役割を認識していた。また、政治小説の効力の大きさを指摘したうえで、政治思想がすべて小説に託される性質を認識していた。両者はまた、ともに政治小説作品との結合を通して論義されたのである。

とどのつまり、梁啓超は政治小説の作品を理解したうえで、政治小説の概念を規定したのか、それとも、上述した明治政治小説概念の啓発を受けて定義したのか、むしろ両方とも含まれているのか、現時点は断言できない。しかしながら先行研究によると、梁啓超の小説観は、坪内逍遥『小説神髄』からの影響、啓発を受けた可能性があるとされる[41]。その説にしたがえば、梁啓超の政治小説概念は坪内逍遥の定義の啓発を受けたうえで、提出されたと考えられる。いずれにしても、清末政治小説の概念は明治政治小説の文壇から発し、しかもその影響や啓発のもとに政治小説概念を定着させたと考えられる。さらに言えば、明治政治小説の影響の下で、清末中国において、政治が小説化され、小説が政治化されて、小説と政治が統一された「政治小説」が成立できたのであると考えられよう。

5．おわりに

以上のように、清末政治小説の術語、概念の形成における、明治政治小説界との導入関係を考察してきた。横浜で創刊された『清議報』に掲載された漢訳『佳人奇遇』と、その序である「訳印政治小説序」は、清末中国においての政治小説の出現を表わしている。なお、横浜で創刊された小説誌『新小説』における政治小説『新中国未来記』の連載、及び「論小説与群治之関係」の掲載は、清末政治小説の術語の定着を表わしている。

このような、雑誌の創刊、小説の漢訳、政治小説の登場などの功績は、すべて梁啓超の日本亡命の賜物である。そのため、中国の前代未曾有の政治小説は、初めて、政治小説の元祖梁啓超によって明治日本より国内に導入されたと言える。つまり、この一連の事実は明治文壇、特に明治政治小説界と切り離せないのである。言い換えると、清末政治小説の術語、概念の形成においては、明治日本の及ぼした影響がかなり強かった。清末政治小説の形成の原因は、梁啓超の亡命先が日本だったことがあげられる。もしも、梁啓超の亡命先が日本でなかったら、清末中国に政治小説が出現したかどうかは、知るよしがない。

また、明治日本が清末小説界に与えた影響は幅広かった。清末術語である政治小説の導入は、清末小説類型の出現における嚆矢となった。政治小説が登場したからこそ、それ以降は各種小説類型が出現を始めたのである。つまり、清末政治小説の出現とは、小説の地位が政治の助けによって文学中の最上乗の地位にまで高まる要因となったのである。

注

1　この小説はイギリスの政治家、小説家リットンの作品で、政治小説として位置づけられている。そして、『佳人之奇遇』への影響も強かったという。木村毅「花柳春話・解題」『明治翻訳文学集』筑摩書房　1972年10月 p396参照。

2　柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』春秋社 1961年9月 p304。

3　漢訳『佳人奇遇』は『清議報』第1冊～第35冊（原作第6篇の巻12の冒頭部分に当たるところで掲載が打ち切られ、途中で『経国美談』の訳載に切り替えられた）に掲載されている。なお、梁啓超と『佳人之奇遇』との出会いに対して、『梁啓超年譜長編』第1巻（丁文江、趙豊田編 島田虔次編訳、岩波書店2004年1月 p269）中で次のように記述している。「戊戌八月、先生は危地を脱して日本に向かった。日本の軍艦の中では、身一つだけで何も携えていなかったので、艦長は気晴らしに『佳人之奇遇』という書物を先生に与えた。先生は読んだ端から翻訳していき、その後、これを『清議報』に掲載した。先生の翻訳は、じつにこの軍艦の中で始まったのである。」

4　陳平原『中国小説叙事模式的転変』（北京大学出版社、2003年7月）山田敬三「『新中国未来記』をめぐって――梁啓超における革命と変革の論理」（狭間直樹編『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房1999年10月所収。）と、郭延礼『近代西学与中国文学』（百花洲文芸出版社 2000年4月 p227）はともに、『新中国未来記』の「まくら」が『雪中梅』の「発端」の形式を参考にし、その倒置手法も同じく模倣したとしている。なお、『雪中梅』は、1903年に江西の人熊垓（夢九）によって漢訳された。

5　中村忠行「『新中国未来記』攷説――中国文芸に及ぼせる日本文芸の影響の一例」『天理大学学報』1巻1号　1949年5月。

6　『新小説』第1～3号、7号に掲載され、第5回掲載後、未完のままである。

7　管見のかぎりでは、山田敬三の「中国政治小説の成立：その理論の比較文学的考察」（『文学論

輯』第22号1975年３月。）がある。山田論文では、中国政治小説の成立について、「社会的背景」「思想的背景」「理論的側面」「理論的根拠」の四点から中国国内の状況を論じているが、明治日本との関係は論じられていない。なお、王暁平『近代中日文学交流史稿』（中華書局香港分局 1987年12月）、夏暁虹『覚世与伝世：梁啓超的文学道路』（上海人民出版社1991年８月）と、何徳功『中日啓蒙文学論』（東方出版社 1995年１月）中では若干触れられているが、しかしその経路は探られていない。

8 『時務報』第44冊1897年11月５日。

9 この長文は1897年10月16日から11月18日まで『国聞報』に連載られた。この段は最後の日に掲載された。

10 『日本書目志』の刊行時間は、竹内弘行の「康有為『日本書目志』の一考察」（『名古屋大学文学部研究論集・哲学』49、2003年３月）による。

11 国家档案局明清档案館編『戊戌変法档案資料』中華書局1958年 p455。

12 『時務報』第45冊1897年11月15日。

13 前三者は西田谷洋の論文「〈政治小説〉の成立」（『翻訳と歴史』１ナダ出版センター2000年７月）による。後者の「政治上の稗史」は、宮崎夢柳『虚無党実伝記・鬼啾啾』緒言による。なお、この点について小論は西田谷の論に多く負っている。

14 『自由燈』1885年５月28日。底本は、吉田精一、浅井清編集『近代文学評論大系』第１巻明治期Ⅰ（角川書店1971年10月）による。

15 『絵入自由新聞』1885年７月17、18日と同月19日。底本は前掲『近代文学評論大系』第１巻。

16 『自由燈』1885年８月４、５日。底本は前掲『近代文学評論大系』第１巻。

17 底本は柳田泉校訂『小説神髄』（岩波書店1936年10月）による。

18 「春鶯囀・自序」（『政黨餘談・春鶯囀』ビーコンスフィールド著、関直彦訳、繪入第１篇、1884年３月。〈底本は雄松堂書店 1982年１月 複製版〉）には「コニングスビー（春鶯囀の原書）と題する政治小説を評したる語なり」との指摘がある。

19 柳田泉『政治小説研究』下巻、春秋社、1968年12月。

20 前掲西田谷洋「〈政治小説〉の成立」参照。

21 この文章はまた、「任公」と署名し、「清議報序」と題して、東亜同文会の機関誌『東亜時論』第２号〈1898年12月）に掲載された。

22 『清議報』上の「訳印政治小説序」の末尾は、「今、特に外国の名人の著述、今日の中国の時局にかかわりの深いものを選んで順序翻訳し、巻末に附載して愛国の士の御覧に入れたい。」としている。一方、阿英（『晩清文学叢鈔』中華書局 1960年）によると『佳人奇遇』の原序の末尾は、「今、特に日本政治小説『佳人之奇遇』を選んで翻訳し、巻末に附載して愛国の士の御覧に入れたい。」としている。この変動は、明治政治小説の漢訳とは、『佳人奇遇』だけに限らず、多くの明治政治小説を訳載しようとした意図であると推測できる。

23 張朋園『梁啓超与清季革命』中央研究院近代史研究所 1964年５月 p282。なお、文中の「県市」は恐らく今の「省市」に当たると思われたから、「省市」に訳した。

24 例えば、周作人は「魯迅与清末文壇」（『魯迅的青年時代』河北教育出版社、2002年１月）中で、「1903年３月魯迅が私に一包みの本を送ってくれた。中には『清議報彙編』８冊、『新民叢報』『新小説』各三冊が入っていた。」とし、『周作人日記』（1903年３月旧暦６日、12日、大象出版社 1996年12月）にも、魯迅はわざわざ日本から周作人に『清議報』を送ったという記述もある。周作人はまた、「関

於魯迅之二」(『瓜豆集』河北教育出版社2001年９月。初出上海宇宙風社、1937年３月』)中で、「最後に梁啓超の編集刊行した『新小説』である。『清議報』『新民叢報』もたしかに読んで大きな影響を受けた。」と、魯迅への影響を指摘している。そうしたことがあって、魯迅は日本到着後、政治小説『斯巴達之魂』を編訳したのだろう。なお、『清議報』、及び連載の政治小説『経国美談』はまた、かつて郭沫若の中学時代の愛読書であった（郭沫若『我的幼年』上海光華書局1929年４月。底本は『少年時代』〔沫若文集第１巻〕生活・読書・新知三聯書店香港分店1978年11月p112)。以上より、当時政治小説の影響が強かったことを知ることができる。

25 「三十自述」1902年12月作、底本は『飲冰室合集』中華書局1989年３月。

26 梁啓超「論学日本文之益」『清議報』第10冊、1899年４月。なお、同文はまた、哀時客（梁啓超の号――寇注）稿として『東邦協会会報』第58号に掲載された。

27 斎藤希史『漢文脈の近代:清末＝明治の文学圏』名古屋大学出版会 2005年２月 p63。初出前掲『梁啓超：西洋近代思想受容と明治日本』。

28 蘭陵氏「累卵東洋・跋」憂亜子訳『累卵東洋』（原本は大橋乙羽著『累卵の東洋』）愛善社印刷、大房元太郎発行1901年５月。

29 前掲島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』第１巻 p288、289。

30 高田早苗「半峯昔ばなし」早稲田大学出版部1927年10月。底本は臼井吉見編『明治文学回顧録集』（一）筑摩書房 1980年３月。

31 浅井清「佳人之奇遇批評・解題」前掲『近代文学評論大系』第１巻 p501。

32 中村忠行「政治小説と清末の文壇」『明治文学全集月報』21、1966年10月。

33 山田敬三「漢訳『佳人奇遇』の周辺――中国政治小説研究札記」『神戸大学文学部紀要』９、1982年３月。

34 坂崎紫瀾「政治小説の効力」『自由燈』1885年５月28日、底本は前掲『近代文学評論大系』第１巻。

35 前掲西田谷洋「〈政治小説〉の成立」。

36 黎躍進『外国文学新論』学林出版社、1997年12月 p311。

37 「飲冰室自由書」『清議報』第26冊、1899年９月５日。

38 柳田泉前掲『明治初期翻訳文学の研究』p178。

39 注36に同じ。なお、樽本照雄の「梁啓超の種本――雑誌『太陽』の場合」(『清末小説から』第50号、1998年７月）によると、この文章は『太陽』第４巻第９号臨時増刊「奠都三十年」(1898年４月25日）中の「第九編　文学」の日本語原本によったとされている。しかし、原本にはこの定義的な話は存在せず、そのため梁啓超が自分なりの認識を加えたと考えられる。

40 「中国唯一之文学報新小説」『新民叢報』第14号1902年８月。

41 前掲何徳功『中日啓蒙文学論』p85。

付記

本稿は筆者の博士学位論文『清末政治小説における明治政治小説の導入と受容――日中近代文学交流の一側面――』の第一章をもとに若干の加筆修正をしたものである。